

Title

外反母趾変形再発に対する危険因子として

第 1 中足骨頭外側縁の形状

The shape of the lateral edge of the first metatarsal
head as a risk factor for recurrence of hallux valgus

大阪医科大学整形外科

Department of Orthopedic Surgery, Osaka Medical College

奥田 龍三 (Ryuzo Okuda)

木下 光雄 (Mitsuo Kinoshita)

安田 稔人 (Toshito Yasuda)

常德 剛 (Tsuyoshi Jotoku)

北野 直 (Naoshi Kitano)

嶋 洋明 (Hiroaki Shima)

【背景】第1中足骨頭の形状と外反母趾変形との関係については明らかではない。本研究の目的は、女性の外反母趾足と健常足との間における第1中足骨頭外側縁のX線学的形状の相違について後ろ向きに調査し、さらに外反母趾足では骨頭外側縁の形状と術後の外反母趾変形再発との関係について明らかにすることである。

【方法】外反母趾に対して第1中足骨近位骨切り術を施行した女性60足(外反母趾群)と健常女性60足(対照群)の荷重位足背底X線像を調査した。外反母趾群では術前、術後早期(平均3.4か月)と最終調査時(平均48か月)のX線像を評価した。第1中足骨頭の関節面と外側面からなる外側縁の形状を観察し、その形状を円形(円型)、角状(角型)およびこれらの中間をなすもの(中間型)の3つに分類した。そして骨頭外側縁の形状が円型に分類されるものをround徴候陽性とした。

【結果】術前の外反母趾群では円型の頻度(87.3%)が対照群(1.7%)に比して有意に高く($p<0.0001$)、角型の頻度は術前の外反母趾群(3.3%)の方が有意に対照群(81.7%)よりも低かった($p<0.0001$)。外反母趾群の術後早期における円型の頻度は術前に比して有意に低かった($p<0.0001$)。術後早期にround徴候陽性例はround徴候陰性例に比して最終調査時における外反母趾変形再発の危険性が有意に高かった(オッズ比, 12.7; 95%信頼区間, 3.21 –50.38)。

【結論】円形の第1中足骨頭外側縁と外反母趾の間には有意な関係があり、第1中足骨近位骨切り後のround徴候陽性は外反変形再発の危険因子である。